

鳴門教育大学学長
広島大学名誉教授
教育学博士

野地潤家 著

古文指導の探究

溪水社刊

〈著者紹介〉

野地潤家（のじ じゅんや）

大正9（1920）年，愛媛県大洲市生まれ。

昭和20（1945）年，広島文理科大学文学科（国語学・国文学専攻）卒業。

愛媛県立松山城北高女教諭，広島高等師範学校教授，広島大学教育学部教授，同附属小学校長（併任），同附属中学校・高等学校長（併任），同教育学部長，鳴門教育大学教授，同副学長，全国大学国語教育会理事長を経る。

現在 鳴門教育大学学長・広島大学名誉教授・教育学博士

専攻 国語教育学—国語教育原論・同各論・国語教育史・国語教育学史—

主著 「話しことばの教育」（昭和27），「教育語法の研究」（昭和28），「国語教育個体史研究」（3冊，昭和29），「国語教育」（昭和31），「国語教育学研究」（昭和36），「作文教育の探究」（昭和47），「国語教育原論」（昭和48），「幼児期の言語生活の実態Ⅱ」（昭和48），「読解指導論」（昭和48），「国語教育学史」（昭和49），「国語教育通史」（昭和49），「幼児期の言語生活の実態Ⅲ」（昭和49），「話しことば学習論」（昭和49），「作文指導論」（昭和50），「幼児期の言語生活の実態Ⅳ」（昭和51），「国語科授業論」（昭和51），「幼児期の言語生活の実態Ⅰ」（昭和52），「作文指導実践入門」（編著，昭和53），「個性読みの探究」（昭和53），「話しことば教育史研究」（昭和55），「国語教育実習個体史」（昭和56），「国語教育の創造」（昭和57），「綴方教授の理論的基礎」（昭和58），芦田恵之助研究」（3冊，昭和58），「国語教育の根源と課題」（昭和59），国語教材の探究（昭和60），「国語教育の探究」（昭和60），「大村はま国語教室の探究」（平成5）

古文指導の探究

平成8年5月1日 発行

著 者 野 地 潤 家

発行所 株式会社 溪水社

広島市中区小町1-4（〒730）

電話 （082）246-7909

FAX （082）246-7876

ISBN4-87440-397-2 C3037

まえがき

昭和二三年（一九四八）四月、私はそれまで勤めていた、愛媛県立松山城北高等学校から母校広島高等師範学校へ移った。そこで私が担当することになった授業科目は、「古今和歌集」（一年生）・「平家物語」（二年生）・「近松（世話物）」（三年生）・「古事記」（三年生）の講読と「芸術論史」（四年生）・「文学概論」（共通、二年生）の講義とであった。それまで、愛媛県立城北高等学校併設中学校（新制中学校）で、国語科を担当し、主として教科書教材を取り扱う授業をしていただけに、母校に帰って、これらの古典（古文）講読をいきなり担当することになった時の重圧感は、当然のことながら言葉を絶するものであった。

私自身学生として広島高等師範学校に在学したのは、昭和一四年（一九三九）四月から昭和一七（一九四二）九月までであった。太平洋戦争下、卒業が六か月繰り上げられたのである。私はつづいて、昭和一七年（一九四二）一〇月から、広島文理科大学文学科（国語国文学専攻）に進み、昭和一九年（一九四四）二月まで在学した。在学したとはいえ、昭和一九年（一九四四）八月下旬からは、勤労動員学徒として、広島県下竹原町にあった三井電練工場へ派遣され、工場勤務をした。大学で授業を受けたのは、昭和一七年（一九四二）一〇月から昭和一九年（一九四四）八月に至る、僅か一年一〇か月に過ぎなかった。

私は昭和二〇年（一九四五）一月、陸軍特別甲種幹部候補生として、仙台陸軍飛行学校に入学し、訓練を受けたが、同年八月二五日、戦争終結（八月一五日）により復員して郷里に帰った。同年九月二九日、広島文理科大学を卒業した。

高等師範学校在学（三年六か月）中、私が受けた古典（古文）講読には、「奥の細道」（一年生、岡本明教授）、「平家物語」（一年生、林実教授）、「近松（世話物）」（二年生、岡本明教授）、「枕草紙」（二年生、林実教授）、「万葉集」（三年生、岡本明教授）、「芭蕉七部集」（四年生、岡本明教授）などがあった。さらに、「新古今和歌集」・「謡曲」・「源氏物語」・「古事記」・「徒然草」などの講読があった。（ほかに、主要な中国古典等の講読を、漢文学担当の先生方からいただいた。）

文理科大学に進んでからは、土井忠生先生に「古事記」・「源氏物語」の講読をしていただいた。鈴木敏也先生からは近代（明治）文学の講義を受けた。

母校に帰って、私が担当した講読も、学生時代に懇ろに指導していただいた、先生方の学恩にその多くを負うていた。当時、連日徹夜にちかい状態で、講読・講義の準備をし、教室に臨んでいた日々が懐かしく回想される。

年来、すこしずつ発表してきた、古典（古文）指導にかかわる論考群を、ここに収録し、『古文指導の探究』として刊行することになった。それにつけて、岡本明先生が広島大学文学部を定年で退職された後、文学部で「おくのはそ道」・「芭蕉七部集」の講読を担当させていただいたことを感深く想い起こし、感謝の念に満たされる。

本書の刊行に際しては、溪水社木村逸司社長に数々の高配をえた。記して、厚くお礼を申し上げる次第である。

平成八年四月一八日

古文指導の探究
目

次

まえがき

.....

i

I 古文指導における基本問題

一 古典文芸教材化の基本問題

.....

5

二 古文指導の基本問題

その一
.....

——「古典乙Ⅰ」の場合——

26

三 古文指導の基本問題

その二

——「古典乙Ⅱ」の場合——

.....

37

II 古文解釈と古文暗誦の問題

四 土井忠生先生の「源氏物語」演習

——国語解釈学の極北——

.....

51

五 「おくのほそ道」の全文暗誦

その一

.....

89

六 「おくのほそ道」の全文暗誦

その二

.....

108

III 古文指導における教材研究

七 芭蕉の修辞意識

——「おくのほそ道」を中心に——

.....

115

八 芭蕉における表現深化 ——炭俵「門しめてだまつてねたる面白さ」の場合——	132
九 「猿蓑」所収の「はつしぐれの巻」の三四の句について ——その生活史的背景など——	164
一〇 「日乗上人日記」考 ——元禄期言語生活の一面——	181
付 古典教育の研究（口述） ——本居宣長を中心に——	197
あとがき	210

古文指導の探究

I

古文指導における基本問題

I 古文指導における基本問題

一 古典文芸教材化の基本問題

一

古典文芸をどのように教材化していくか。この問題はやさしくはないが、心をひそめて考えていけば、新しい境域をきりひらいていくことができるように思われる。

私はかつて、日本文学に流れている抒情精神を感得させようとして、“白鳥”に関する作品・文章を集めて、ほぼ時代順に、次のように配列・集成したことがある。今から二五年も前のことである。

主題 白鳥の悲歌—日本文芸の抒情的展開—

一、大和し美し 古事記（景行天皇の条）

二、白鳥のさと 風土記（常陸国風土記、風土記逸文〈近江国〉）

三、思慕の炎 万葉集（笠女郎の歌）

四、都鳥哀歌 伊勢物語（第九段）

五、寿永の秋風 平家物語（巻第七福原落）

六、鷺坂山・他 万葉集・他（白鳥を詠みこんだ和歌群）

七、鳥のアルバム（その二） 枕草子（第三十九段）

八、白良の鷗 催馬楽

九、狂へる母―隅田川― 謡曲

一〇、旅情 芭蕉・他（発句・連句）

二、鳥のアルバム（その二） 風俗文選（支考「百鳥譜」）

三、流離哀唱 近代詩（島崎藤村・室生犀星・三好達治）

三、都鳥と白鷺 鷗外・白秋

四、寂寥のはて 牧水・他（近代短歌―若山牧水・前田夕暮・斎藤茂吉・古泉千樫、近代詩―佐藤春夫）

五、白鳥の悲しみ（千家元麿詩集）

これらは、B 6 判八二ページほどのテキストにまとめられ、京都の学芸出版社から刊行された。編者名は、私の広島高師時代の恩師岡本明先生になっていた。

「古事記」・「風土記」・「万葉集」・「伊勢物語」・「平家物語」・「枕草子」・「催馬楽」・「謡曲」・芭蕉から森鷗外はじめ、千家元麿まで、「白鳥」という素材がどう扱われているかを中心に、日本文芸の抒情的展開を見ていこうとしたのである。古代文学から近代文学まで、「白鳥」の形象化を中軸にして考察していくことで、各時代の古典文芸の特質を浮彫りにしていくことができるように感じた。

たとえば、

1 白鳥能 しらとりのおう 飛羽山松之 とばやまのまつ 待乍曾 まちつね 吾恋度 わがこひゆる 此月比乎 このつきひに（万葉集卷四、笠女郎）

2 白鳥 しらとり 鷺坂山 さぎさかやま 松影 まつかげ 宿而往奈 やどりてゆかな 夜毛深往乎 よもふけゆくを（万葉集卷九、作者未詳）

I 古文指導における基本問題

3 休らひに出けん方もしら鳥のとば山松のねにのみぞ鳴く（続古今、藤原定家）

4 霞まづば春ともえやはしら鳥のとば山松に雪は降りつつ（風雅、大江頼重）

5 白鳥のとば山松になびく雲ひと羽ばかりもすゑにおくれて（草徑集、大隈言道）

6 白鳥は悲しからずや空の青海の青にも染まず漂ふ（若山牧水）

のような流れを見ても、「白鳥」は、修辭の面から、枕詞・懸詞に用いられているとともに、素材としてもとりあげられている。歌としては聞こえているものではないが、藤原定家の歌（前掲3）では、「しら鳥の」の「しら」を、動詞（知ら）にも、また連体修飾（白）にも、そして、枕詞としても用いられており、ことば・表現の技巧に冴えを示した藤原定家の面目をうかがわせる。

これらは一例にすぎないが、歌集単位の扱いでは、こぼれてしまったり、扱われなかったりするものが、こうした主題単元の扱いによって、救われてくる。それは多くの発見をも可能にしていこううだ。

また、「都鳥」に関しては、

1 さる折しも、白き鳥の嘴と脚と赤き、鳴の大きさなる、水の上にあそびつつ魚をくふ。京にはみえぬ鳥なれば、みな人見しらず。渡守に問ひければ、これなん都鳥といふをききて、

名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ、舟拏りて泣きにけり。（伊勢物語第九段）

2 昨日は東関の麓に轡を並べて十万余騎、今日は西海の浪に纜を解て七千余人、雲海沈々として、青天既に暮なんとす。孤島に夕霧隔て月海上に浮べり。極浦の浪を分け、塩に引かれて行船は、半天の雲に浜る。日数歴れば、都は既に山川程を隔て、雲井の余所にぞ成にける。遙々来ぬと思ふにも、

唯尽ぬ者は涙なり。浪の上に白き鳥のむれゐるを見給ひては、彼ならん、在原のなにがしの隅田川にて言問ひけん、名も睦敷き都鳥にやと哀也。寿永二年七月二十五日に、平家都を落果ぬ。(平家物語卷七、福原落)

3 シテ「なう舟人、あれに白き鳥の見えたるは、都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ぞ。」

ワキ「あれこそ沖の鷗候よ。」

シテ「うたてやな浦にては、千鳥ともいへ鷗ともいへ、などこの隅田川にて白き鳥をば都鳥とは答へ給はぬ。」

ワキ「げにげに誤り申したり。名所には住めども心なくて、都鳥とは答え申さで、」

シテ「沖の鷗と夕波の、」

ワキ「昔にかへる業平も、」

シテ「有りや無しやと言問ひしも、」

ワキ「都の人を思ひ妻、」

シテ「わらはも東に思ひ子の、行方を問ふは同じ心の、」

ワキ「妻をしのび、」

シテ「子を尋ねるも、」

ワキ「思ひは同じ、」

シテ「恋路なれば、」

地上歌「我もまた、いざ言問はん都鳥、我が思ひ子は東路に、有りや無しやと、問へども問へども答へ

I 古文指導における基本問題

ぬは、うたて都鳥、鄙の鳥と言ひてまし。げにや舟競ふ、堀江の川の水際に、来居つつ鳴くは都鳥。それは難波江これは又、隅田川の東まで、思へば限りなく、遠くも来ぬるものかな。さりとては渡守、舟にこぞりて狭くとも乗せてたび給へ。」（謡曲 隅田川）

4 塩にしていざことづけん都鳥 芭蕉

5 角田川にて

いざのぼれ嵯峨の鮎食ひに都鳥 貞室

6 都鳥 森 鷗外

初夏の日暮。みどりの

ただ中に夕ばえ煉瓦

まねかざるまらうどと立つ、

高鳴るや嘲る汽笛。

機関の不断の鞭に

むちうたれはためき過ぐる

塗舟に経をゆづりて、

川の緯漕ぐわたり船。

房州と人呼ぶ聞きし